

京鹿子



10月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その十三

馬 下 駄 の 秋 め く 湿 り 躡 り 口
鮎 落 ち て 碧 を こ ぼ す 瀬 の 早 み
鮎 落 ち て 宿 の 板 さ ん 三 分 刈 り
ひ ら が な を 抱 い て 暮 る る 日 赤 の ま ま
筆 順 の 一 画 太 し 秋 初 め
周 到 の 蓑 虫 鬼 面 脱 い で を り



錯迷の脳ひらけば秋の声
秋蟬に言問ひもなき祇王庵
竹林の節の高きに秋のこゑ
内侍訪ふ露ひとつぶの供養塔
逍遙の果てのががんぼ嵯峨離宮
秋蝶の駆け込む空や直指庵
みづいろの文を認む白露の日
白露や触るるばかりの仔牛の瞳

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

ちちろの闇

し ば ら く は ち ち ろ の 闇 に 影 を 描 く

竹 林 の 径 は ひ と す ぢ 嵯 峨 素 秋

酒 の 字 や ち や う ち ん す で に 秋 め き ぬ

— 追 懐 — (そ の 二 十 三)

新 蕎 麦 や 名 将 讚 へ 城 下 あり
〔平成七年作〕

無 花 果 の 腹 割 つ て よ り 親 疎 な し
〔平成七年作〕



— 近 詠 —

和田 照海

燧灘

沢 鳴 り の 訝 返 し や 花 山 葵
辻 堂 を 遠 慮 づ か ひ に 田 植 の 餉
結 界 の 蟬 と り の 子 を 赦 し お く
白 南 風 や 外 観 音 の 燧 灘
舟 よ り も 島 の 大 揺 れ 朱 夏 の 航



松本 鷹根

夏 薊

方丈の軒の深さや昼寝する

竹落葉ひらひら和む磨崖仏

青田風鷺一對の白誇る

夏薊遠嶺に色を求めざり

真野真砂細波涼し遠伊吹

近 詠



塩貝 朱千

巴里祭

思ひ出せぬ黒いレースの夢の人

露涼し鯉の集まるひとところ

巴里祭紅さし指の残り火よ

終章の未だまとまらず瀧一途

泣き上戸の羅漢くすぐる白桔梗

英華採集

神木のふところ深し青葉木菟

福 山 亀 井 福 恵

青葉繁れる頃ともなると神域の様相も一変する。丁度この時期に渡ってくる梟が、自分が身を置く場所を熟知しているがごとく「神木のふところ深し」と表現したところと季語を「青葉木菟」としたことによる相乗効果を上手く働かせている。

遠雷やけふこそ返さう母の傘

草 津 池 村 禎 子

遠くから聞こえてくる雷の音を母の声と捉えた作者の心の内に追懐が怒濤のように甦る。それは、妣から受けた数々の恩・慈しみに違いない。そして、その声に応えようと妣のようになることを誓う。今まで自分を支え守ってくれた傘を返し、今度は自分が傘を差しかけるのだと。

噴水の空へカリヨンの未来

京 都 樋 口 正 子

空高く噴水が上がる。噴水に強弱のリズムがあるようにそれは、人生の浮き沈みと言えるかも知れない。しかしながら、子供の未来にとって噴水の高く上がる様は、輝ける明日を象徴するものであろう。そのような噴水の空へ流れるカリヨンの音は、晴渡った世界へ子供達を誘おうとしているようだ。



水引の花 藤岡紫水

漁火の線となる夜の天の川
街に夜を残し遠のく稲びかり
寺に生れ寺で往生法師蟬
桐一葉地に着くまでの間合ひかな
水引の花に夕風夕日影

風呂吹 沼田巴字

水写りしてゆらぎたる秋の山
藁塚のひとり遊びの影法師
蓑虫や孤児たることを天は知り
風呂吹やどこより箸を入れるべき
雑炊や戦後史一つ書き上げる

霹靂神 丸井巴水

梶子の一片欠けて奇数の夜
都路を袈裟懸けに切るはたした神
mamushi酒杣屋泊まりの粗筵
白鷺の嘴の一刺し銀尾得る
キヤラメルキヤラメルの紙の折鶴梅雨明ける

蟾蜍太る 伊藤希眸

竹の葉の散る淡闇に人の声
坪庭へ居候決め蟾蜍太る
風の吹く頃の葛鏝かちしかちがや原
考妣こうひの絹のうすさで青田来る
涼しさを部屋に通して誰も居ず

北川孝子

比叡嶺に雲たち上がる梅雨晴間
夏野行く遊行はじめの一步かな
暁光や不惑のいろの濃紫陽花
人生に好機はいくつ夏野行く
過ぎ去れば皆些事なりし大夏野

紫陽花 直江裕子

バラ一枝握り生き直せぬものか
梅雨晴れを全部いたたくやうに干す
少し老い透きとほるまで青き踏む
紫陽花のほとぼりほどのこれも恋
新緑の風より老いのやはらかき



追ひかけぬ 高木晶子

片方の手を遊ばせて凌霄花
 ほうたるの帰るところは追ひかけぬ
 沙羅の花枝を離れてより寧し
 沙羅の花忘れられたる百度石
 錠剤のころがりゆくや蟬の穴

口答へ 木戸渥子

短夜や活字奴隸となつてをり
 滝に背骨瀬にふくらはぎ手に句帳
 夫に口答へどくだみ花盛り
 梅漬けて辣菲漬けて清廉潔白
 血液を減らさぬために昼寝する

二十の扉 奥田筆子

夏休二十の扉の子供部屋
 嬪座より乙女座怖し夏大根
 金盞にはしごを立てて夜店びと
 容赦なき否定に合ひぬ鳥の恋
 棒高跳あとは宙踏み夏の雲

地下三階 井上菜摘子

踏台にふみだいが要る梅雨の書架
 傘もてば地下三階も梅雨の街
 梅雨の駅五人そろふまでが長い
 水占は吉あぢさゐの裏見てしまふ
 店主敬白そろそろ燕孵ります





京鹿子集

鈴鹿呂仁選

神木のふところ深し青葉木菟

福 山 亀井 福恵

紫陽花の彩をたたへて婚の使者

香合の色絵に夏の陽ひかり合ふ
公達の面立ちに似て大白百合

瀬戸小島人住むかぎり雲の峰

サボテンの海にアディオス麦藁帽

アリソナ 伊吹 之博

いもうとといふ気安さの秋扇

流灯の祖国を想ひ手の放つ

遠雷やけふこそ返さう母の傘

草 津 池村 禎子

若人とのぞむ句会や夏の陣

顔づかるばかりの母や水中花

汗しとど熊野古道を独りゆく

追ひ越してバツクシヤンなり夏帽子

夏の月涼しげに笑む木の間から

オハイオ 水谷直子

味噌五種の茄子田楽や義母の味

夕風の音なき時間留守居かな

噴水の空へカリヨンの未来

京 都 樋口 正子

玄関のパンジー笑ふ我もまた

瀬音闇やがては星になる螢

庭飾る緑の中のタンポポヤ

生花展蕾ほころび五月尽
札 梶 野村 鞆枝

コーラスに加はるチャペル花は葉に

メロデーに歩調合せて新入生

祈り終へバザーの庭にかき水

若葉冷え朝の散歩を先導す

雨上がり杜鵑花に含む雨しづく

ふと見れば去年の今の山法師

炎帝の下に球打つシルバー杯

「紫峰」誌の重み受止め明け急ぐ

復興の道のり遠し墓に日除

油照災害手つかず文化財

水茄子の育ち楽しみ夫好み

墓地に立つ四囲の山々夏化粧

立札に「猿に用心」盆の墓地

父母の墓洗ふ額の汗清し

つばくらめ古巣修理し卵抱く

永らへる金魚真つ赤に揺れながら

此処からは立入禁止ジギタリス

あれそれで過ごしてしまふ浮いて来い

静けさを絵筆に置くや桃ふたつ

大夕焼け權振りかざしカヌー行く

風五月おむつもこもこ鬼ごっこ

酒 田 藤波 松山

洪 川 東 秋茄子

さいたま 神田 惣介

千 葉 高野 春子

布川 孝子

バルコンのみどりの風に髪を梳く

つゆ晴れ間干し物揺れる駐在所

風薫るサンバのリズム森に踏み

せせらぎの音は夜に浸み虫飛ぶ

河鹿鳴く時空湛へて野に放つ

麦秋や今日の一日を若きまま

木霊宿る大楠の洞滴るる

薬つまれ白ゆりの芯深くなる

夏帽子重くなりゆく波の音

出目金の目絵手紙へと跳びだせり

汗一升金一粒の山男

一握の小骨になりし木下閣

堰を切り鳴咽のひろぐ青芒

添ひとげる覚悟の小指著莪の花

みな同じ方向く怖さ日輪草

雨あがる予感夏蝶高く飛ぶ

嘘泣きを覚えたる児や氷菓子

子どもの八分休符となり沈む

もう会へぬお互ひさまや梅雨に入る

炎天下自販機の前で飲むコーヒー

やまももを落とす帚や昔の味

梅雨晴間流れを聞くは久しぶり

松 戸 岡山 敦子

習志野 上野 紫泉

船 橋 元橋 孝之

金子 正道

東 京 野中 圭子